

## 畜群の動態を通して見た市場経済化：ケニア中北部・サンブルの世帯経済の事例

湖 中 真 哉

### 1. はじめに

自給自足的な生業経済を基調とする東アフリカの牧畜社会は、しばしば、地球上において最も市場経済の影響力が及びにくかった辺境地域のひとつとして数えられてきた。しかしながら、近年、この地域にもグローバルな市場経済の影響力は及びつつあり、彼らの社会は、地球規模の巨大な市場経済体系の末端として組み込まれつつある。ウシ文化複合と呼ばれる家畜と深く結びついた独特の文化を形成してきた東アフリカ牧畜民も、今やその家畜を商品として家畜市場に出荷するようになり、彼らの元々の生業経済と市場経済の関係を再定義することを迫られつつある状況に置かれている。

アフリカを対象とした生態人類学・経済人類学においては、こうした市場経済化の様態を具体的に分析するために様々な研究方法が試みられてきた。なかでも、世帯経済 (household economy) における家計の研究は、生業経済と市場経済の相互関係を分析し、微細な水準から経済のグローバル化を照射するのに好適な研究方法を提供している。とりわけ、東アフリカの牧畜社会における世帯研究は、農耕社会に比べて少ないことが指摘されており (Roth, 1990 : 441-442)、近年、その重要性に注目する研究が増加している (Roth, 1990 ; Holtzman, 1999)。

ファーガソン (Ferguson, 1992 : 57) が正しく指摘するように、世帯が異なる種類の富を有する社会においては、世帯の経済的豊かさを評価することは複雑な作業となる。アフリカの周辺社会においては、例えば、多数の家畜を所有している人物の世帯が、衣装や家屋においても豊かな暮らしを享受しているとは限らないのである。東アフリカの牧畜民にとっては、財産とは何よりも家畜を意味する。もちろん、彼らの社会では、畜産物による自給自足体系も完全に崩壊したわけではなく、部分的な改変

を伴いつつも依然として機能を保ち続けている。このような社会において、現金の収支だけを問題にしてもすくい取られる現実には極めて限られたものでしかない。それゆえ、市場社会における家計の概念をそのまま東アフリカの牧畜社会にあてはめれば、その家計の現状がすべて理解できると考えるのは明らかに誤りである。少なくとも、牧畜社会における世帯経済を論じるためには、財の保有形態として、家畜と現金の両方を射程に入れる必要がある。したがって、牧畜社会における家計の分析を行うためには、現金の収支のみならず、世帯内における家畜の収支を考察の対象に含めなければならない。このうち、牧畜世帯における現金の収支については、別稿で扱うことを予定しており、本稿では、家畜の収支を主要な記述と分析の対象とする。

牧畜社会の場合、世帯における家畜の収支は、畜群の動態から読み取ることが可能である。それゆえ、畜群の動態についての事例研究は、世帯経済の側から市場経済との関係性を照射するための有力な手掛かりを提供し得ると考えられる。そこで、本稿では、ケニア中北部に居住する牧畜民サンプルの世帯経済における畜群の事例を中心に扱い、その動態を様々な角度から分析することによって、牧畜社会における市場経済化の様相を例証することを試みる。

## 2. サンプルとその経済の概要

サンプル (Samburu: 自称は *Iloikop*) は、ケニア中北部のリフトヴァレー州サンプル県 (Samburu District) に広がる半砂漠地帯を主な居住地とする牧畜民である。言語的には、東ナイル系に属するマー語の北部マー (North Maa) 方言を話し (Sommer and Vossen 1993)、人口は、1999年の人口統計によると143,547人を擁すると推定されている (Republic of Kenya 2001)。現在、ほとんどのサンプルは、牧草が不足したときには集落と放牧キャンプの二分居住制をとり、集落自体は数年おきに移動する方式の半遊動 (semi-nomadic) 生活を送っている。

サンプルの人々の多くは牧畜を生業とし、ウシと小家畜 (ヤギとヒツジ) の飼育によって生計を成り立たせている。彼らは、家族内分業体制のもとに家畜の放牧管理を行い、食料や日用品の自給自足に努めてきた。そのため、以前は、日常生活の維持に必ずしも現金を必要としなかったと言われている。市場経済が浸透した今日でさえも、生業牧畜による自給自足体系は基本的に維持されている。

サンプルの社会構造は、大きく言って、父系の分節出自体系 (segmentary descent system) と年齢体系 (age system) によって組織化されている。サンプル社

## 畜群の動態を通して見た市場経済化：ケニア中北部・サンプルの世帯経済の事例

会は一夫多妻の婚姻形態をとるため、大きく言って、家族には一对の夫婦とその子供達から成る単婚家族 (monogamous family) と、一人の夫と彼の複数の妻達とその子供達から成る複婚家族 (polygamous family) がある。経済的な生計の基本的単位である世帯 (household) を構成しているのは、多くの場合、ひとりの長老を中心とした単婚ないし複婚の家族である。通常、長老は、妻子に対して生前分与した家畜も含めて、彼の世帯の全家畜に対する処分権を有している。

複婚家族では、各妻はそれぞれ独立した家屋を構え、そこで子供達と生活している。このように主に母子から構成される家屋集団 (house) は、サンプル語で家屋を意味する「ンカジ (enkaji)」と呼ばれ、育児と家事の基本的単位を構成している。サンプル社会においては、一般的に、世帯の長は男性の長老であり、家屋集団の長はその妻や母であるとされる (Sperling, 1987: 124)。複数の妻をもつ夫は、通常、近接して設置される各妻の家屋を日毎に巡回して寝食する。

集落 (settlement: *enkan*) は、他の集落とは数百メートル以上を隔てる居住単位である。通常、ひとつの集落は、2～5程度の家族から構成されている。通常、集落の近隣 (*latia*) は、共通の家畜囲い (*boon gish*) に牛群を収容し、家畜管理などに関して日常的な協同を行う。集落は、牛群の家畜囲いの周囲を家屋が取り囲む楕円形の形状を呈している。

サンプルの居住地は、近年、早魃と家畜の病気の流行に繰り返し襲われており、その機会に、多くの人々が牧畜のみに依存する生活の不安定さを自覚した。とりわけ1984年の早魃以降、ケニア政府や先進国の開発援助団体は、この地域の人々に対して市場参入、農耕、ラクダ飼育、学校教育、民芸品製作等を導入する計画を進めた。また、賃金収入を求めて、都市部での夜警の仕事や、軍隊、警察、教員などの公務員職に従事するサンプルが増加した。

1991年に、こうした開発計画の一環として、サンプル県南端ロロキ郡のスグタマルマルに家畜の定期市が開設された。この家畜市 (*mauso ya Suguta*: スワヒリ語) は、ケニア政府とサンプル地方議会 (Samburu country council) の主導のもとに開設され、開設当時、隔週木曜日に定期的で開催されていた。これは、サンプル県はもとより、ケニア北部の牧畜民の地域において初めて開設された本格的な家畜の定期市である。家畜定期市開設以前の1989年には1,980頭に落ち込んでいたウシの県外への出荷頭数は、開設後の1991年には12,410頭になり、527%の伸びを示している。この伸びは、『サンプル県開発計画』において劇的な増加 (increased dramatically) と特筆されている (Republic of Kenya 1993: 43)。この家畜市には、サンプル県の

全域から家畜が持ち込まれ、100km以上離れた場所から徒歩で家畜を持ち込まれる場合も稀ではない。多い時には、2,000頭近くの家畜、1,000人近くの人が家畜市に集まって来る。

こうした経緯を経て、サンプルの社会の中にも現金経済が急速に浸透し始めた。食生活においては、人々は畜産物のみならず、賃金による収入や家畜を売却した金でトウモロコシ等の穀類を購入して食べるようになった。衣類も手作りによる家畜の皮製衣料からインドネシア産等の既製品へと変化した。現在では、中国製の時計や、日本製のラジオカセット、インド製の自転車を所有する者も珍しくない。現在、サンプルの経済は、もはや完全に自律的な生業経済とは言えず、国家・国際規模の市場経済の一部として、その末端に組み入れられつつあることは疑い得ない。

### 3. 家計の基本的単位と調査対象

サンプル社会においては、家畜と現金の両方にわたる牧畜家計の基本的単位を構成しているのは世帯である。世帯は、夫と一人ないし複数の妻と、その未婚の子供達から構成されている。

サンプルの世帯では、家畜の最終的処分に関する権利を掌握しているのは夫である(Perlov, 1987 : 127 ; Fumagalli, 1977 : 83-84)。夫は、出生、割礼、結婚などの機会に妻や子供達に家畜を生前分与していく。妻は自分に分与された家畜をさらに子供達に分与する。妻達は、それぞれ夫から分与された家畜を搾乳し、その乳を彼女の家屋集団内で消費する。原則的に、夫は、たとえ妻子に既に分与した家畜であっても、彼の意志で屠殺したり、売却したりすることができる。

夫は、世帯の所有者 (*lopeny*) とみなされており (Holtzman, 1996 : 152)、世帯のなかで、家畜と現金に関する最終的処分権を掌握している。ただし、離婚した女性や寡婦は、夫に代わって家畜や現金の処分権を持つことがある。また、全く妻子の意向を顧みないで家畜を処分する夫は、社会的非難の対象となるため、夫は世帯の絶対的な支配者や所有者というよりも、世帯の管理者や調停者とみるほうが妥当である (Holtzman, 1997 : 97 ; Straight, 1997 : 27)。

私が調査の主要な拠点としたレンゲルデッド集落は、サンプル県 (Samburu District) ロロキ郡 (Lorroki Division) のキシマ (Kisima) という町から7 kmほど西に位置している。私が本稿における調査と分析の対象としたのは、レンゲルデッド集落内の二世帯である。調査を開始した1992年時点での集落の人口は78人、世帯数は13

## 畜群の動態を通して見た市場経済化：ケニア中北部・サンプルの世帯経済の事例

世帯、家屋集団数は18集団を数え、この地域ではかなり規模の大きな集落として知られている。

私は、このレンゲルデッド集落内の二つの世帯を対象として、1995年10月から1996年9月の一年間にわたる牧畜家計の調査を行った。調査は、各世帯内の現金と家畜の収支に関して毎日家計簿に記帳してもらい、後日、私が記載事項について質問する方法で行った。本稿では、仮名を用いて、世帯A、世帯Bとそれぞれ表記する。

このうち、世帯Aは、既に別稿（湖中 2002）で紹介した家畜商の世帯である。この世帯は、ルクマイ胞族に属している（ある集団が出自によって二つの集団に分かれるとされる場合、この二つの区分を「半族」と呼び、半族のなかのそれぞれの集団区分を「胞族」と呼ぶ）。彼は1974年以降ナイロビに出稼ぎに出ていたが、1991年に父親の指示に従い帰郷した。集落に戻ってからは、牧畜に加えて小家畜の取引を中心とした家畜商を営んでいる。1996年10月時点で二人の妻との間に10人の子供がいる。この二人の妻は、それぞれ家屋集団を形成している。世帯内では、家畜の処分や現金の用途はすべてA氏が決定する。

A氏は亡父の第一妻の長男である。彼の母親は、世帯Aと同じ集落内に家屋を構え、A氏とは別の家屋集団を形成している。A氏は、父親の死後、この年老いた母親の経済的な支出をすべて賄っている。ただし、母親の家畜については、A氏ではなく、母親自身がその処分権を有している。それゆえ、本稿における世帯Aの現金の収支の資料にはA氏の母親による支出も含まれているが、家畜の資料に関しては、この母親の家畜は含まれていない。

世帯Bは、離婚世帯である。B婦人は、かつて第一妻だったが、1989年に離婚した。B婦人は、A氏の異母姉である。B婦人は、前夫との間に8人の子供をもうけたが、2人が既に婚出し、現在集落にいるのは6人である。このうち2人の男性が既に割礼を受けた青年である。離婚後も、子供達は、前夫のロロキシユ胞族に所属している。B婦人は、彼女が既に出産していることを理由に、離婚後も前夫に婚資を返却していない。1996年10月の時点で母親と6人の子供で家屋集団を構成している。この世帯では、離婚後、B婦人が長男と話し合っただけで家畜の処分や現金の用途を決定している。

B婦人の長男は、中学校（secondary school）を卒業後、家計を助けるため、1992年の11月にナイロビの石鹼会社で夜警の仕事についた。しかし、夜警中に盗賊に入られ、わずか二週間で解雇された。その後は、集落に戻って母親とともに牧畜に従事している。世帯Bは家畜商を営んでいるわけではないが、自宅で小規模な砂糖と紅茶の葉の小売業を営んでいる。

1996年10月の時点で、世帯を構成している人数は、世帯Aの場合13人、世帯Bの場合7人である。世帯Aは世帯Bの約二倍の構成員を擁することになる。両世帯とも牧畜をおもな収入源とするが、世帯Aの場合には家畜商を、世帯Bの場合には砂糖と紅茶の葉の小売業をそれぞれ営むことで商業によっても収入を得ている。

#### 4. 家畜収支の概観

表1は、世帯Aと世帯Bの保有する飼育用家畜の頭数を示したものである。家畜商を営む世帯Aでは、家畜群の繁殖や生計の維持を目的として恒常的に飼育している家畜を「飼育用家畜 (*swom naabare*: *naabare*は「飼育」の意)」と呼ぶ。これに対して、はじめから、売却による利益を得ることを目的として、外部から買い付けられ、一時的にのみ保管される家畜を「商売用家畜 (*swom piashara*: スワヒリ語の *biashara*に由来)」と呼んでいる。飼育用家畜は、おもにメス個体、未成熟個体、種オス個体から構成され、母系で継承される命名方式に従って命名される。これに対して、商売用家畜は、おもに去勢個体から構成され、全く命名されないのがふつうである。本稿では、調査対象者が飼育用家畜として挙げた家畜のみを分析の対象とする。

表1に示したのは、1996年の9月の時点における飼育用家畜の頭数である。本稿で取り扱う家畜に関する資料は、1995年10月から1996年の9月までの期間における家畜

表1 世帯Aと世帯Bの保有する飼育用家畜頭数 (1996年9月時点の畜群)

家畜種	世帯A(13人構成)	世帯B(7人構成)	合計
オスウシ	35	6	41
メスウシ	54	9	63
ウシ小計(頭)	89	15	104
オスヤギ	95	7	102
メスヤギ	101	16	117
ヤギ小計(頭)	196	23	219
オスヒツジ	99	50	149
メスヒツジ	143	107	250
ヒツジ小計(頭)	242	157	399
合計(頭)	527	195	722
SSU*換算値	133	33	166
一人当たりのSSU*換算値	10	5	8

\*SSU=Standard Stock Units: 標準家畜単位数 (小家畜1頭をウシ0.1頭分としてウシ頭数に換算)

## 畜群の動態を通してみた市場経済化：ケニア中北部・サンプルの世帯経済の事例

群の推移に基づいている。ただし、この期間中に死亡、売却、屠殺などにより減少した家畜は、表1の対象に含めていない。

全家畜の合計頭数をみると、世帯Aは527頭、世帯Bは195頭の家畜をそれぞれ保有するので、世帯Aは、世帯Bの2.7倍の値を示す。世帯員一人当たりの家畜数は、世帯Aは40.5頭、世帯Bは27.9頭であり、世帯Aは、世帯Bの1.46倍の値を示す。世帯員一人当たりに換算しても、世帯Aのほうが多くの家畜を保有していることがわかる。

以上の計算では、ウシも小家畜も同じ1頭として扱った。ただし、実際にはサンプル社会の社会的価値においても、市場価格においても、ウシと小家畜の価値には大きな開きがある。そこで、ウシと小家畜の頭数に比重をかけて換算し、世帯における家畜の財力を比較することができる。このような換算値は、標準家畜単位数 (Standard Stock Units : SSU) と呼ばれ、多くの研究者や研究機関が異なる家畜種の換算比を定めている。しかし、各換算比の値は、研究者間で一致をみておらず、それぞれが独自に定めた換算単位を用いているのが現状である (Dahl and Hjort, 1976 : 224-226)。本稿では、サンプルの固定交換レートを考慮して、それと比較的近いサンドフォード (Sandford) のウシを基準とした換算値を使用し、小家畜 (ヤギとヒツジ) 1頭をウシ0.1頭とする比率で、全てウシ頭数に換算してSSU換算値を算出する (Dahl and Hjort, 1976 : 228)。

全家畜の合計頭数のSSU換算値は、世帯Aでは133、世帯Bでは33であり、世帯Aは、世帯Bの4倍の値を示す。世帯員一人当たりの家畜数のSSU値は、世帯Aが10、世帯Bは5であり、世帯Aは、世帯Bの2倍の値を示す。世帯Aは、世帯員一人当たりについて、世帯Bの約2倍の家畜の財力を保有すると考えてよいと思われる。

家畜種および性別に、世帯Aと世帯Bの管理する家畜頭数をみると、いずれの項目でも世帯Aが世帯Bを上回っている。家畜種ごとにみると、世帯Aの家畜頭数は、世帯Bの家畜頭数に対して、ウシの場合5.9倍、ヤギの場合8.5倍、ヒツジの場合1.5倍を示す。世帯Aと世帯Bの差は、ヒツジに関しては僅差であるが、ウシとヤギに関してはかなりの差が開いていることがわかる。

サンプル社会では、小家畜は、いわば小銭のように、日々の細かな出費に充てられるのに対して、ウシは、いわば定期預金のように、婚資などのまとまった出費に対する蓄財としての意義をもっている。経済的に余裕のない人々は、細かな出費に追われる傾向があるため、社会的価値の低い小家畜を多く持つ傾向があるが、経済的に豊かな人々は、財産を蓄財にまわし、社会的価値の高いウシを多く持つ傾向がある。世帯Aの保有するウシが世帯Bよりもかなり多いのは、このような理由によるものである。

とくに、世帯Bでは、小家畜のなかでもヒツジの肥育に力を入れており、ヒツジについては、世帯Aとの差があまり開かなかったと思われる。

表2は、世帯Aと世帯Bの家畜の増減について示したものである。家畜が増加する機会は、自然出産による場合、現金で家畜を購入した場合、家畜と家畜を物々交換した場合、家畜の贈与を受けた場合などである。家畜の出産による場合は、1995年10月から1996年9月の間に生まれた個体が対象とされる。

ウシの増加は、世帯Aが29頭、世帯Bが7頭を示し、小家畜は、世帯Aで172頭、世帯Bで74頭がそれぞれ増加した。いずれの家畜種も世帯Aの方が世帯Bよりも二倍以上の増加となっている。

増加の大半を占めるのは、家畜の自然出産による新生児の頭数(265頭)であり、増加頭数中94%を占める。購入頭数について見ると、ウシの場合は、世帯A(6頭)のほうが世帯B(2頭)よりも多いのに対して、小家畜の場合は、世帯B(4頭)のほうが世帯A(0頭)よりも多くなっている。これは、世帯Aは、ウシの獲得に重点を置いているのに対して、世帯Bは小家畜の獲得に重点を置いているからである。交換による取得は、いずれも去勢ヒツジ1頭と交換に未經産ヒツジ1頭を獲得したもの

表2 世帯Aと世帯Bの家畜の増減(1995年10月～1996年9月)

家畜種	増減の理由	世帯A(13人構成)			世帯B(7人構成)			総計		
		増加	減少	収支	増加	減少	収支	増加	減少	収支
ウシ	自然出産	23[10]	0	—	5[1]	0	—	28	0	—
	購入	6[4]	0	—	2[0]	0	—	8[4]	0	—
	交換による取得	0	0	—	0	0	—	0	0	—
	贈与による取得	0	0	—	0	0	—	0	0	—
	斃死	0	5[1]	—	0	2[1]	—	0	7[2]	—
	屠殺	0	0	—	0	1[0]	—	0	1[0]	—
	売却	0	2[0]	—	0	1[1]	—	0	3[1]	—
	交換による授与	0	0	—	0	0	—	0	0	—
	贈与による授与	0	0	—	0	0	—	0	0	—
	小計	29[14](14%)	7[1](37%)	22[13](12%)	7[1](9%)	4[2](6%)	3[-1](16%)	36[15](13%)	11[3](14%)	25[12](12%)
小家畜	自然出産	171[86]	0	—	66[29]	0	—	237[115]	0	—
	購入	0	0	—	4[3]	0	—	4[3]	0	—
	交換による取得	1[1]	0	—	3[3]	0	—	4[4]	0	—
	贈与による取得	0	0	—	1[1]	0	—	1[1]	0	—
	斃死	0	8[5]	—	0	34[18]	—	0	42[23]	—
	屠殺	0	0	—	0	2[0]	—	0	2[0]	—
	売却	0	3[0]	—	0	15[0]	—	0	18[0]	—
	交換による授与	0	1[0]	—	0	4[0]	—	0	5[0]	—
	贈与による授与	0	0	—	0	3[3]	—	0	3[3]	—
	小計	172[87](86%)	12[5](63%)	160[82](88%)	74[36](91%)	58[21](94%)	16[15](84%)	246[123](87%)	70[26](86%)	176[97](88%)
総計(頭)	201[101](100%)	19[6](100%)	182[14](100%)	81[37](100%)	62[23](100%)	19[14](100%)	282[138](100%)	81[23](100%)	201[109](100%)	
SSU*換算値	46	8	38	14	10	5	61	18	43	

\*SSU=Standard Stock Units: 標準家畜単位数(小家畜1頭をウシ0.1頭分としてウシ頭数に換算)  
[ ]は、メス個体数で内数



## 畜群の動態を通して見た市場経済化：ケニア中北部・サンプルの世帯経済の事例

である。世帯Bのみ、贈与による取得の頭数が1頭あるが、これは、B婦人の三男が、放牧労働の謝礼として、彼の母方オジからもらった未經産ヒツジである。

新生児を除く家畜に関して、世帯Aと世帯Bの家畜の増加を家畜の性別にみると、17頭中メス家畜が12頭(71%)を占めている。家畜の増加の場合、彼らは、オス家畜よりもメス家畜を多く得る傾向があることがわかる。

つぎに、家畜の減少についてみると、家畜の減少の機会としては、家畜の斃死による場合、家畜を屠殺した場合、家畜を売却した場合、家畜と家畜を物々交換した場合、家畜を他人に贈与した場合などが挙げられる。この調査期間中、家畜の貸与は全く行われなかった。ウシの減少は、世帯Aが7頭、世帯Bが4頭を示し、小家畜の減少は、世帯Aが12頭、世帯Bが58頭を示す。世帯Bの小家畜の減少が目立っているが、これは、彼らの小家畜群で病気が流行したからである。

減少の多くを占めるのは、家畜の斃死による頭数(49頭)であり、総減少頭数中60%を占める。売却頭数について見ると、ウシの場合は、世帯A(2頭)と世帯B(1頭)にあまり差がみられないのに対して、小家畜の場合は、世帯B(15頭)のほうが世帯A(3頭)よりも多いことがわかる。ただし、ここでの頭数には含まれていないが、既に別稿(湖中 2002)で明らかにしたように、家畜商を営む世帯Aでは、おもに小家畜の取引によって現金収入を得ている。ただし、世帯Bのような家畜商を営まない一般的な世帯においても、小家畜の売却が重要な現金収入源を担っていることがわかる。交換頭数は、いずれも、未經産ヒツジ1頭の獲得と引き替えに、去勢ヒツジ1頭を相手に引き渡した場合の家畜の頭数を示す。

屠殺頭数や贈与頭数に関して、世帯Bが世帯Aを上回る結果を示しているが、これは、世帯Bのほうが世帯Aよりも頻繁に家畜を屠殺したり贈与したりしていることを意味するのではない。これらの数値は、飼育用家畜のみを対象としているが、家畜商を営む世帯Aでは、しばしば手元にある商売用家畜を屠殺や贈与に転用している。商売用家畜を世帯Aの数値に含めると、屠殺頭数は、ウシが2頭、小家畜が3頭、贈与頭数は、ウシが1頭、小家畜が0頭である。

世帯Aは、1996年7月26日に、A氏の第一妻の同母の弟にあたる青年に商売用家畜である去勢ウシ1頭を与えている。サンプル社会では、結婚後も、姻族は、受妻者側に対して様々な要求をすることが認められているので(Spencer, 1965: 35)、この青年は、彼の「種ウシのムギエツト儀礼」の際に屠殺する家畜を求めて来た。世帯Bは、この集落に新しく加入した新婦二人に対して、一頭ずつ、そして、家畜乞いに来たB婦人の旧友に対して1頭、それぞれ未經産ヒツジを与えている。家畜を与えた人物と

新婦は、ヒツジを意味するサンプル語 *nker* に接頭辞 *pa* を加えた *pankera* という言葉で互いを呼び合う。このような場合には、サンプル社会では、通常、未經産の家畜を与えるのが適当であるとされる。

死亡頭数を除く家畜に関して、世帯Aと世帯Bの家畜の減少を家畜の性別にみると、32頭中メス家畜は5頭(16%)を占めているに過ぎない。家畜の収入の場合とは対照的に、彼らは、家畜を支出する場合は、家畜を贈与する場合などを除いて、メス家畜よりもオス家畜を使用する傾向があることがわかる。

期間中、世帯Aは2頭のオスウシを売却して、4頭のメスウシを購入している。世帯Bは、15頭のオスの小家畜を売却して、3頭のメスの小家畜を購入している。両世帯とも、オスを売却してメスを購入する操作を行っている可能性が指摘できる。しかし、世帯Aの場合には小家畜に対して、世帯Bの場合にはウシに対して、このような操作を行っているわけではない。このように、操作対象となる家畜種が、世帯Aの場合にはウシであり、世帯Bの場合には小家畜であることは、両世帯が重点的に肥育しようとしている家畜種の違いを示していると考えられる。

世帯Aと世帯Bの家畜の収支をSSU換算値でみると、世帯Aが38の増加をあげているのに対して、世帯Bは5の増加にとどまり、世帯Aは、世帯Bの7.6倍の家畜の増加をあげる結果となった。世帯Aと世帯Bでは、もともとの保有個体数に開きがあるため、出生頭数に差が出るうえに、世帯Bでは、小家畜群で病気が流行したことが収支に響いたと考えられる。

## 5. 世帯内における家畜の分与

サンプル社会では、夫は、結婚や割礼などの機会に彼の家畜を妻や子供達に少しずつ生前分与していくが、夫は、家畜の処分の権利を分与した後も引き続き保持している。

表3は、世帯Aと世帯Bについて、1996年9月時点における世帯内での家畜の保有頭数をみたものである。ウシの保有頭数をみると、世帯Aの世帯員のなかで、夫の保有頭数が最も高い割合(33%)を占めており、第一妻(20%)や第二妻(18%)がそれぞれ二割程度を占めるものの、他の世帯員はそれほどウシを保有していない。小家畜の保有頭数の場合、第一妻が半分以上(65%)を占めており、第二妻(18%)と合わせると83%を示し、二人の妻達の個体が畜群の大半を占めている。牛群の場合とは対照的に、夫は8%を保有するに過ぎない。このように、世帯Aの場合、ウシについ

畜群の動態を通して見た市場経済化：ケニア中北部・サンプルの世帯経済の事例

表3 世帯内での家畜の保有頭数（1996年9月時点の畜群）

家族関係	世帯A（13人構成）		世帯B（7人構成）	
	ウシ	小家畜	ウシ	小家畜
夫	29 [ 33%]	36 [ 8%]	—	—
独立婦人*	—	—	2 [ 13%]	4 [ 2%]
第一妻	18 [ 20%]	283 [ 65%]	—	—
長男	15 [ 17%]	9 [ 2%]	8 [ 53%]	35 [ 19%]
次男	9 [ 10%]	19 [ 4%]	1 [ 7%]	50 [ 28%]
三男	0 [ 0%]	0 [ 0%]	4 [ 27%]	21 [ 12%]
四男	—	—	0 [ 0%]	41 [ 23%]
長女	0 [ 0%]	7 [ 2%]	0 [ 0%]**	7 [ 4%]**
次女	0 [ 0%]	0 [ 0%]	0 [ 0%]**	4 [ 2%]**
三女	—	—	0 [ 0%]	15 [ 8%]
四女	—	—	0 [ 0%]	3 [ 2%]
第二妻	16 [ 18%]	81 [ 18%]	—	—
長男	2 [ 2%]	3 [ 1%]	—	—
長女	0 [ 0%]	0 [ 0%]	—	—
計（頭数）	89 [100%]	438 [100%]	15 [100%]	180 [100%]

\*：離婚して独立世帯を構えている。\*\*：既に婚出した娘。—：該当者なし。

ては、あまり個体の分与が進んでいないのに対して、小家畜群については、既に大半を二人の妻に分与している。

同様に、世帯B内におけるウシの保有頭数をみると、世帯員のなかでは、長男が約半分（53%）を占めている。母親（独立婦人）は13%を占めるに過ぎず、ほとんどの個体は、彼女の子供達に既に分与されている。小家畜の場合、次男が最も高い割合（28%）を占めており、四男（23%）がそれに続いている。母親は、わずか（2%）を占めるにすぎず、ほとんどの小家畜が、彼女の子供達に分与されている。このように、世帯Bの場合、母親が既に大半の個体を子供達に分与しており、とくに長男が畜群中かなりの割合の個体を分与されている。

畜群の分与に関する具体的な資料を提示しているわけではないが、スペンサー（Spencer, 1965: 53）は、畜群のうち、各妻に割り当てられた部分を「分与済み畜群（allotted herd）」、その残りの夫によって保持されている畜群を「残余畜群（residual herd）」と呼んでいる。サンプル社会では、最終的な家畜の処分の権利は夫に属するのが基本原則であるが、夫は、妻に既に分与した家畜を、他の妻に割り当て直したり、自分の残余畜群に戻したりしてはならないとされる（Spencer, 1965: 56）。世

帯Aでは、既に搾乳に十分なウシを各妻に分与しているので、家畜の処分をめぐって妻達と争うのを避けるために、夫が自由に処分できる残余家畜を残している可能性がある。例えば、夫が今後さらに複婚を重ねる場合には、彼は、結婚後、新婦に与えるためのウシを彼の残余畜群のなかに残しておかなければならない。また、A氏は長男であるため、亡父に対する供養の儀礼を行う際には、家畜を供出しなければならない。世帯Aの牛群中、夫の残余畜群が高い割合を示すのは、こうした配慮によるものと考えられる。

サンプル社会では、年齢組の所定の諸儀礼を済ませなければ、結婚することができないが、世帯Bでは、B婦人の長男が結婚可能な時期に近づいている。サンプル社会では、通常、婚資としてウシ7頭とヒツジ2頭を最低限準備しなければならない。ウシの婚資負担が小家畜よりも大きい。とくに牛群において、長男の個体の割合が高いのは、彼が結婚のための婚資の準備を進めているからであると考えられる。

## 6. 家畜の性別

サンプルの人々自身は、家畜の成長段階を区別するのに、オスの場合は去勢の有無を、メスの場合は経産歴の有無を基準とすることが多いが、若い時に去勢される個体もあれば、生育が進んでから去勢される個体もあるため、このような区別は、必ずしも生物的な成長段階とは一致しない。そのため、調査においては、既に成長した個体については、その正確な年齢を確定することが困難であった。

そこで、本稿では分析の便宜上、すべての家畜に対して、1995年10月から1996年9月の間に新しく生まれたことがはっきりしている個体を新生個体、それ以前に生まれた個体を2歳以上の個体とする成長区分を設定する。

表4は、世帯Aと世帯Bの畜群について、本稿で設定した区分に基づいて、新生個体と2歳以上の個体に分けて、性・年齢別の割合を算出したものである。

新生個体と2歳以上の個体について、メス家畜の割合を比較すると、世帯A、世帯Bともに共通して、新生個体に比べて、2歳以上の個体のほうが、メス家畜の割合が高い割合を示す。

これは、すなわち、家畜が成長するにつれて、両世帯の人々が、可能な限りメス家畜を手元におき、手放す場合にはオス家畜を選択する操作を行った可能性を示していると思われる。屠殺や売却の際にオスが選択された可能性があることは言うまでもないが、既に別稿(湖中 2004)で検討したように、家畜市は、オスを売却する機会を

畜群の動態を通して見た市場経済化：ケニア中北部・サンプルの世帯経済の事例

表4 蓄群の性・年齢別構成（1996年9月時点の畜群）

		世帯A（13人構成）		世帯B（7人構成）		総計	
		ウシ	小家畜	ウシ	小家畜	ウシ	小家畜
新生個体	メス	10 [ 50%]	83 [ 50%]	1 [ 17%]	25 [ 42%]	11 [ 11%]	108 [ 17%]
	オス	10 [ 50%]	82 [ 50%]	5 [ 83%]	34 [ 58%]	15 [ 14%]	116 [ 19%]
	小計	20 [100%]	165 [100%]	6 [100%]	59 [100%]	26 [ 25%]	224 [ 36%]
2歳以上の 個体	メス	44 [ 64%]	161 [ 59%]	8 [ 89%]	98 [ 81%]	52 [ 50%]	259 [ 42%]
	オス	25 [ 36%]	112 [ 41%]	1 [ 11%]	23 [ 19%]	26 [ 25%]	135 [ 22%]
	小計	69 [100%]	273 [100%]	9 [100%]	121 [100%]	78 [ 75%]	394 [ 64%]
計(頭数)		89	438	15	180	104	618

新生個体は、1歳未満の個体である。

地元民に提供している。なかなか好機は少ないとはいえ、場合によっては、メスを購入することも可能である。世帯Aと世帯Bの畜群中、2歳以上のメス家畜の割合が高くなっているのは、自然の性比によるものとは考えにくく、こうした人々による操作の結果を反映したものと考えられる。

ただし、2歳以上の個体群中のメス家畜の割合は、世帯Aと世帯Bでは差がみられる。牛群中のメス家畜の割合をみると、世帯Aが64%であるのに対し、世帯Bは89%を示す。小家畜群中のメス家畜の割合をみると、世帯Aが59%であるのに対し、世帯Bは81%を示す。つまり、いずれの畜群についても、2歳以上の個体群中のメス家畜の割合は、世帯Bのほうが世帯Aよりも高い割合を示している。

比較的裕福な世帯Aでは、オス家畜の肥育が十分進んだ時点まで待つて売却することができる。これに対し、経済的に余裕のない世帯Bでは、現金を得るために、比較的若い成長段階でオス家畜を売却せざるを得ない。2歳以上の個体群中のメス家畜の割合に関して、両世帯間で差がみられるのは、経済的余裕の度合いと関連したオス家畜を売却する時期の違いによるものと考えられる。

また、2歳以上の個体群中のメス家畜の割合は、世帯A、世帯Bともに、家畜種ごとに差がみられる。世帯Aでは、メス家畜の割合は、ウシが64%であるのに対し、小家畜が59%を示す。世帯Bでは、メス家畜の割合は、ウシが89%であるのに対し、小家畜が81%を示す。つまり、両世帯ともに、2歳以上の個体中のメス家畜の割合は、小家畜よりもウシのほうが、やや高い割合を示している。

これは、ウシは、乳を産出して食生活を支える家畜として、小家畜より重要であるため、メスが手元に残されたことをある程度反映していると思われる。また、小家畜は増殖率が高いため、売却の影響が出にくく、性差が現れにくいことも影響している

可能性がある。

## 7. 母系個体群の始祖の入手方法

サンプル社会では、畜群は、ある母親個体を共通の始祖とする子孫から成る母系個体群を単位として把握されている。このような母系個体群は、サンプル語で「家屋」を意味するンカジ (*enkaji*) と呼ばれている。母系の始祖を同じくする子孫は、すべてその母系の始祖の名前に、オスの場合は *le*、メスの場合は *ne*、という接頭辞を付けて命名される。例えば、Rapa という名前の母個体がメス個体を産んだ場合、その仔は接頭辞 *ne* を付けて *Ne-rapa* と命名され、オス個体を産んだ場合は接頭辞 *le* を付けて *Le-rapa* と命名される。さらに、その *Ne-rapa* が出産した場合には、その仔は、メスの場合 *Ne-rapa*、オスの場合 *Le-rapa* と繰り返し同じ名前が命名される。一般的に、ひとつの畜群は、このようないくつかの母系個体群が中心となり、それに直接に外部から入手した若干のオス個体を加えて、構成されている。

こうした各母系個体群の始祖となる家畜は、畜群中に既にいた母親個体から生まれたのではなく、人々がなんらかの機会にそうした個体を入手した結果、畜群を構成するようになったわけである。表5は、1996年9月当時の世帯Aと世帯Bの畜群のなか

表5 母系個体群の始祖となる家畜の入手方法 (1996年9月時点の畜群)

	世帯A (13人構成)		世帯B (7人構成)		総 計	
	ウシ	小家畜	ウシ	小家畜	ウシ	小家畜
購入	9 [ 45%]	26 [ 67%]	0 [ 0%]	8 [ 21%]	9 [ 36%]	34 [ 44%]
交換	3 [ 15%]	7 [ 18%]	2 [ 40%]	8 [ 21%]	5 [ 20%]	15 [ 19%]
贈与 父親から	5 [ 25%]	2 [ 5%]	0 [ 0%]	1 [ 3%]	5 [ 20%]	3 [ 4%]
母親から	1 [ 5%]	1 [ 3%]	0 [ 0%]	0 [ 0%]	1 [ 4%]	1 [ 1%]
兄弟から	0 [ 0%]	1 [ 3%]	0 [ 0%]	3 [ 8%]	0 [ 0%]	4 [ 5%]
妻の父から	0 [ 0%]	1 [ 3%]	0 [ 0%]	0 [ 0%]	0 [ 0%]	1 [ 1%]
娘の婚資	0 [ 0%]	0 [ 0%]	1 [ 20%]	1 [ 3%]	1 [ 4%]	1 [ 1%]
前夫から	0 [ 0%]	0 [ 0%]	0 [ 0%]	7 [ 18%]	0 [ 0%]	7 [ 9%]
友人から	2 [ 10%]	0 [ 0%]	0 [ 0%]	1 [ 3%]	2 [ 8%]	1 [ 1%]
湖中から	0 [ 0%]	0 [ 0%]	0 [ 0%]	1 [ 3%]	0 [ 0%]	1 [ 1%]
婚出した娘から	0 [ 0%]	0 [ 0%]	0 [ 0%]	1 [ 3%]	0 [ 0%]	1 [ 1%]
放牧の謝礼	0 [ 0%]	0 [ 0%]	0 [ 0%]	2 [ 5%]	0 [ 0%]	2 [ 3%]
不明	0 [ 0%]	1 [ 3%]	2 [ 40%]	6 [ 15%]	2 [ 8%]	7 [ 9%]
計 (頭数)	20 [100%]	39 [100%]	5 [100%]	39 [100%]	25 [100%]	78 [100%]

母系の始祖を入手した時期は、1995年10月～1996年9月に限定されない。

## 畜群の動態を通してみた市場経済化：ケニア中北部・サンプルの世帯経済の事例

にいる母系個体群の全始祖を対象として、それを入手した方法の割合を示したものである。母系の始祖を入手した時期は、1995年10月～1996年9月に限定せずに、入手した全ての時期を対象とした。ここで扱われている家畜は、もちろん全てメスであり、飼育用家畜に分類される。

世帯Aと世帯Bの母系個体群の始祖の総計をみると、購入によって得た家畜が最も高い割合を占めている。つまり、この両世帯を総計した場合、母系個体群の始祖の最大の入手源は、今や、両親からの相続でも、家畜の物々交換でも、婚資でもなく、現金による購入であることがわかる。とくに、世帯Aの場合、購入が占める割合が高く、ウシが45%、小家畜が67%と、いずれも入手した母系個体群の始祖の半分近くを占めている。もちろん、この両世帯の事例が、この地域全体に当て嵌まるかどうかは不明であるが、この地域の人々が、母系個体群の始祖となる家畜を、長期間にわたって購入し続けることで、畜群を大きくしてきたことが窺える。

ただし、世帯Aの場合には、購入によって得た母系個体群の始祖が、ウシの場合も小家畜の場合も、最も高い割合を示すのに対して、世帯Bの場合には、購入によって得た小家畜は、交換と同率で最も高い割合を示すものの、購入によって得たウシは皆無である。これは、両世帯の現金収入源の差異を反映していると考えられる。世帯Bは、ごく最近になって砂糖と紅茶の葉の小売業を始めたとはいえ、これまで安定した現金収入源をもたなかった。それに対して、世帯Aは、出稼ぎで得た賃金や、家畜商で得た利益を使用して、現金で家畜を頻繁に購入している。

世帯Bが購入によって得た母系個体群の始祖 ( $n=8$ 頭)のうち、賃金や商業の利益を使用して購入した家畜は皆無であり、購入資金が不明の家畜 (50%)を除くと、全て他の家畜を売却して得た現金で購入した家畜である。これに対して、世帯Aが購入によって得た母系個体群の始祖のうち ( $n=35$ 頭)、半分以上 (63%)の家畜は、出稼ぎで得た賃金や家畜商の利益を使用して購入した家畜であり、他の家畜を売却して得た現金で購入した家畜の割合は37%に過ぎない。購入した家畜が、入手した始祖全体中に占める割合をみると、世帯Aのほうが、世帯Bよりも高い割合を示すのは、世帯Aのほうが現金収入を得る機会が多く、しかも、それを母系個体群の始祖の購入につぎこんできたからであると考えられる。

母系個体群の始祖が出産して、さらにその子孫が出産を繰り返すことによって、その母系個体群は長期間のうちに徐々に大きくなっていく。表6は、世帯Aと世帯Bが購入によって入手した始祖とその子孫が出産を繰り返すことによって形成した母系個体群について、その頭数と、それが畜群全体に対して占める割合を示したものである。

表6 世帯Aと世帯Bが購入によって入手した始祖が形成した母系個体群  
(1996年9月時点の畜群)

家畜種	世帯A (13人構成)		世帯B (7人構成)		総計	
	購入によって入手した始祖が形成した母系個体群の頭数	畜群全体(表1を参照)に占める割合	購入によって入手した始祖が形成した母系個体群の頭数	畜群全体(表1を参照)に占める割合	購入によって入手した始祖が形成した母系個体群の頭数	畜群全体(表1を参照)に占める割合
オスウシ	10	29%	0	0%	10	24%
メスウシ	15	28%	0	0%	15	24%
ウシ小計(頭)	25	28%	0	0%	25	24%
オスヤギ	58	61%	1	14%	59	58%
メスヤギ	67	66%	1	6%	68	58%
ヤギ小計(頭)	125	64%	2	9%	127	58%
オスヒツジ	67	68%	2	4%	69	46%
メスヒツジ	91	64%	18	17%	109	44%
ヒツジ小計(頭)	158	65%	20	13%	178	45%
合計(頭)	308	58%	22	11%	330	46%
SSU*換算値	53	40%	2	7%	56	33%

母系個体群の始祖自身を頭数に含む

\*SSU=Standard Stock Units: 標準家畜単位数  
(小家畜1頭をウシ0.1頭分としてウシ頭数に換算)

母系個体群の始祖自身も、この表の頭数に含めている。世帯Aと世帯Bの総計をみると、購入によって得た始祖が形成した母系個体群が、畜群全体の半分近く(46%)を占めていることがわかる。つまり、彼らの畜群の半分近くは、購入によって得た家畜によって形成されてきたのである。SSU換算値でも約3割(33%)を占めている。世帯Aと世帯Bを比較すると、世帯Aでは、畜群の半分以上(58%)が、購入によって得た始祖によって形成された母系個体群に属するのに対して、世帯Bでは、畜群の約一割(11%)を占めるに過ぎない。SSU換算値でも、世帯Aが40%を占めるのに対して、世帯Bでは7%に留まる。とりわけ世帯Aの小家畜群では、ヤギが64%、ヒツジが65%と、非常に高い割合を占めていることがわかる。

これまで、様々な観点から、世帯Aと世帯Bを比較してきたが、少なくとも、畜群を分析した場合、世帯Aの畜群規模が世帯Bを上回る結果を示すことが多かった。現金の収支については、別稿で詳述する予定であるが、現金の収支についてみても、世帯Aの経済力が世帯Bを上回っていることは間違いない。レンゲルデッド集落の人々と雑談していると、世帯Aがこの近辺でも有数の家畜持ちであることに話が及ぶことがある。彼らは決まって言う。「だって、A氏は昔出稼ぎに出ていたし、今は家畜商



## 畜群の動態を通してみた市場経済化：ケニア中北部・サンプルの世帯経済の事例

で儲けたお金を家畜に注ぎ込んでいるからね」。このように、世帯Aの周辺の人々も、A氏が出稼ぎや家畜商によって現金の利益を得ており、それを使用して飼育用家畜を購入し、彼の畜群を増殖させてきた仕組みに気が始めている。家畜の入手方法の分析は、確かにこうした集落の人々の指摘が正しいことを裏付ける結果を示すこととなった。世帯Aの家畜の繁殖源となるメス家畜の実に半分以上は、現金で購入した家畜によってもたらされたものだったのである。そして、世帯Aが購入した始祖が出産し、長期間にわたって、母系個体群を順調に繁殖させていったため、今や、畜群の6割近くが、購入によって得た始祖が形成した母系個体群によって占められている。こうした仕組みが、現在みられるような世帯Aの経済的な余裕を生むに至ったと推定される。

## 8. おわりに

### (1) 二世帯の家計戦略の比較考察

これまでの家畜の収支の分析の結果、世帯Aと世帯Bの家計は様々な点において、対照的な特徴を示すことが明らかになった。

現金の収支については別稿で扱う予定であるが、ここでごく簡単に概観しておく、1995年10月から1996年9月までの一年間に、世帯Aは18,733シリングの利益を計上しているのに対し、世帯Bは6,359シリングの損失を計上している。本稿で検討した家畜の収支についても、世帯Aの収入がSSU換算値38に対し、世帯Bは5にとどまっている。世帯員一人当たりのSSU換算値は、世帯Aが10を示すのに対し、世帯Bはその半分の5を示すに過ぎない。これらを総合的に評価すると、世帯Aの経済力は、世帯Bをはるかに凌いでいる。この地域では、世帯Aは例外的に裕福な世帯であるといわれており、世帯Bのような経済状況にある世帯がサンプルの世帯としては一般的である。

こうした経済力の格差をもたらした要因として、様々な理由が考えられる。世帯Bは離婚後の世帯である。B婦人とその子供達は、前夫から既にかかなりの頭数の家畜を分与されていたとはいえ、世帯Bが、夫からの扶養や家畜の分与を期待できない状況にあることは、その経済力に影響していると思われる。また、世帯Bは、1987年に、小家畜群の放牧中に、65頭をハイエナに食い殺されるという事件を経験している。この事件が世帯Bに与えた経済的打撃は多大であったという。

ただし、これらの状況による理由で、両世帯の経済的格差を生みだした原因をすべて説明できるわけではない。既にみたように、世帯Bが購入によって得た母系個体群

の始祖のうち、賃金や商業の利益を使用して購入した家畜は皆無であるのに対して、世帯Aが購入によって得た母系個体群の始祖のうち半分以上の家畜は、賃金、あるいは家畜商の利益を使用して購入した家畜である。

つまり、世帯Bでは、現金収入源が限られているので、畜群の繁殖力を購入により強化することが困難なのに対して、世帯Aでは、出稼ぎや家畜商で得た現金を使用して、母系個体群の始祖となる家畜を購入することで、畜群の繁殖力を強化することに、ある程度、成功している。また、世帯Bでは、現金収入源が限られているので、現金の必要が生じた際には、家畜を売却せざるを得なくなるのに対して、世帯Aでは、出稼ぎや家畜商で得た現金を出費に充てることで、家畜を売却せずにすませることが可能である。このような仕組みが複合的に働いた結果、世帯Aと世帯Bの経済的な格差が開いたと考えられる。

畜群についてみても、世帯Aと世帯Bが保有する畜群構成の分析から、両世帯が保有する家畜種の傾向に違いが認められた。世帯Aが管理する家畜の頭数は、いずれの家畜種においても世帯Bを上回っているが、その度合いには違いがみられる。世帯Aの家畜頭数は、世帯Bの家畜頭数に対して、ウシが5.9倍を示すのに対して、小家畜は2.4倍を示すに過ぎない。世帯Aは世帯Bよりもウシを圧倒的に多く保有するのに対して、小家畜に関しては、その差は縮まっている。

これは、経済的に裕福な世帯は、社会的価値・市場価値が高く蓄財的な性格をもつウシを中心に管理する飼育戦略を採るのに対して、経済的に余裕のない世帯は、価値が低く、日常の出費に充てることの多い小家畜を中心に管理する飼育戦略を採っていることを示していると考えられる。

## (2) 畜群が示す生業経済と市場経済の関係性

本稿では、サンプルの地域経済における市場経済化の様相を畜群の動態の事例から照射してきた。その結果、母系個体群の始祖となる家畜の7割近くを現金による購入によって入手している小家畜群すら存在していることが解明できた。こうした世帯では、実にその畜群の6割近くが、購入によって得た始祖によって形成された母系個体群によって占められているのである。東アフリカ牧畜民の畜群は、一般的に言って、贈与や相続、娘の婚資、物々交換、略奪などをおもな母系始祖の入手の機会として、形成されることが多いが、本稿の分析結果は、現在のサンプルの経済が、市場経済の著しい影響化にあり、彼らの経済生活が、もはや市場経済と不可分なまでの深い関係を取り結んでいることを示している。

## 畜群の動態を通して見た市場経済化：ケニア中北部・サンプルの世帯経済の事例

むしろ、現在のサンプルの世帯経済においては、市場経済の存在を前提として経済活動が営まれているとみるべきである。このような現状を無視して、彼らの世帯経済を外部から孤立した自己完結的な生業経済として描き出すことは、もはや、虚構でしかありえない。アフリカの牧畜民を、保守的、頑迷、非合理的、反抗的とみなす言説に対しては、既に厳しい批判が繰り広げられているが (Livingstone, 1977: 214-215; Perlov, 1987: 84; Knowles and Collett, 1989: 449; ダイソン=ハドソン, 1998: 173)、市場を積極的に利用することにより畜群を形成してきた本稿におけるサンプルの事例もまた、そうした言説に対する反証を提示している。

しかし、その一方で、サンプルの人々が、世帯経済の論理の側に引き寄せて、市場経済を巧みに利用していることも本稿の分析結果から明らかになった。畜群の性別分析からは、サンプルの人々が可能な限りメス家畜を手元におき、市場で家畜を手放す場合には、オス家畜を選択している可能性が示された。母系個体群の始祖となる家畜の分析からは、出稼ぎで得た賃金や家畜商で得た利益によって現金収入が得られる世帯では、その現金収入でメス家畜を購入して、畜群を繁殖させていることが明らかになった。こうした分析結果は、サンプルの家計においては、人々の社会的関心は、たんに現金を入手することよりも、生業経済の核心を成す家畜を入手して畜群を繁殖させることに対して向けられていることを示している。

それゆえ、家畜市場が開設され、人々が家畜を売却して現金を手にするようになったからといって、このような現象の表面だけを捉えて、彼らの社会が全面的に市場経済化したとみなすことはできない (湖中 2004)。別稿で詳述する予定であるが、サンプル社会においては、家畜を売却してつぎつぎに現金化してしまう人物や、せっかく現金を得ても家畜を購入しない人物は、社会的に軽蔑される傾向にある。そのため、サンプル社会では、現金や市場を利用するようになった結果、家畜を基礎とした生活世界まで損傷してしまうような振る舞いは、社会的な規範に反していると判断される。

少なくとも、1990年代までのサンプル社会をみる限り、家畜市周辺に居住するサンプルの人々は、牧畜を基盤とした世帯経済を保持し、その一部として現金や市場の世界を選択的に利用しながら組み入れてきたことは疑い得ない。彼らの世帯の多くは、市場や現金を、家畜に収斂する社会的関心に適合し、それに沿って利用することが可能な範囲内においてのみ受容しているのである。

こうした意味において、現在の彼らの経済体系は、ローカルな生業経済が経済のグローバル化の影響を受けずに自己完結的に存在する状態にあるのでも、経済のグローバル化の結果、ローカルな生業経済が全面的に駆逐されてしまった状態にあるのでも

ない。本稿における畜群の動態の事例が示すように、生業経済と市場経済が独特の方式で組み合わさりつつ併存している点こそが、現在のサンプルの世帯経済を特徴づけている特質なのである。

## 謝 辞

本稿は、筆者を研究代表者とする以下の文部科学省科学研究費補助金による調査研究の成果を含んでいる。

平成12～13年度 奨励研究(A) 「ケニアの牧畜社会における自然・家畜・人間認識の統合的研究 (課題番号: 12710168)」

平成14～15年度 若手研究(B) 「東アフリカ・マー語系社会における物質文化と商品経済の変遷に関する人類学的研究 (課題番号: 30275101)」

平成16～17年度 萌芽研究 「東アフリカ・マー語系社会における廃物利用のヴァーチャル・ミュージアム構築 (課題番号: 16652064)」

## 引用文献

- Dahl, G. and Hjort, A. 1976 *Having Herds: Pastoral Herd Growth and Household Economy*, Stockholm Studies in Social Anthropology. University of Stockholm, Stockholm.
- ダイソン=ハドソン、N. 1998 (『開発援助と人類学』勉強会訳) 「牧畜生産システムと畜産開発プロジェクト: 東アフリカにおける視点」(チュルネア、M. M. 編 (『開発援助と人類学』勉強会訳)) 『開発は誰のために—援助の社会学・人類学』、社団法人 日本林業技術協会、東京: 153-179. (Dyson-Hudson, N. 1991 Pastoral Production Systems and Livestock Development Projects: An East African Perspective. in (M. M. Cernea, ed.) *Putting People First: Sociological Variables in Rural Development*, 2nd edition. World Bank / Oxford University Press, New York: 219-256).
- Ferguson, J. 1992 The Cultural Topography of Wealth: Commodity Paths and the Structure of Property in Rural Lesotho. *American Anthropologist*. 94-1: 55-73.
- Fumagalli, C. T. 1977 *A Diachronic Study of Change and Socio-Cultural Process among the Pastoral Nomadic Samburu of Kenya, 1900-1975*. Ph. D. dissertation, State University of New York at Buffalo.

## 畜群の動態を通してみた市場経済化：ケニア中北部・サンプルの世帯経済の事例

- Holtzman, J. D. 1997 Gender and the Market in the Organization of Agriculture among Samburu Pastoralists. *Research in Economic Anthropology*. Vol. 18: 93-113.
- Holtzman, J. D. 1999 Households, Gender and Age Sets: Domestic Processes and Socioeconomic Organization among the Samburu of Northern Kenya. (D. B. Small, and N. Tannenbaum, eds.) *At the Interface: The Household and Beyond, Monographs in Economic Anthropology*. No. 15, University Press of America: 41-54.
- Knowles, J. N. and Collett, D. P. 1989 Nature as Myth, Symbol and Action: Notes towards an Historical Understanding of Development and Conservation in Kenyan Maasailand. *Africa*, 59 (4): 433-460.
- 湖中 真哉 2002 「生業牧畜と市場経済を結ぶ地域ネットワーク—ケニア中北部サンプルの家畜商の事例」 (佐藤 俊 編) 『講座生態人類学 4 遊牧民の世界』京都大学学術出版会、京都：175—222。
- 湖中 真哉 2004 「牧畜民による市場の利用方法—ケニア中北部サンプルの家畜市の事例」 (田中 二郎・佐藤 俊・菅原 和孝・太田 至 編) 『遊牧民—アフリカの原野に生きる』昭和堂、京都：650—685。
- Livingstone, I. 1977 Economic Irrationality among Pastoral Peoples: Myth or Reality? *Development and Change*, 8: 209-230.
- Perlov, D. C. 1987 *Trading for Influence: The Social and Cultural Economics of Livestock Marketing among the Highland Samburu of Northern Kenya*. Ph.D. dissertation, University of California.
- Republic of Kenya 1993 *Samburu District Development Plan 1994-1996*. Office of the Vice-President and Ministry of Planning and National Development, Nairobi.
- Republic of Kenya 2001 *1999 Kenya Population and Housing Census Vol.1*. Central Bureau of Statistics, Ministry of Finance and Planning, Nairobi.
- Roth, E. A. 1990 Modeling Rendille Household Herd Composition. *Human Ecology*, Vol. 18, No. 4: 441-455.
- Sommer, G. and Vossen, R. 1993 Dialects, Sectiolects, or Simply Lects? : The Maa Language in Time Perspective. in (T. Spear and R. Waller, eds.) *Being Maasai: Ethnicity and Identity in East Africa*. James Currey, London: 25-37.
- Spencer, P. 1965 *The Samburu : A Study of Gerontocracy in a Nomadic Tribe*. Routledge & Kegan Paul, London.
- Sperling, L. 1987 *The Labour Organization of Samburu Pastoralism*. Ph.D. dissertation, McGill University.
- Straight, B. S. 1997 *Altered Landscapes, Shifting Strategies: The Politics of Location in the Constitution of Gender, Belief, and Identity among Samburu Pastoralists in Northern Kenya*. Ph. D. dissertation, University of Michigan.